

佐井村は「小さくてもキラリと光る村」と紹介されることがあります。この特集では、誇りをもって活動している方、夢実現のための挑戦や、むらづくりに奮闘する方など、佐井村の“ヒト”という魅力にスポットライトをあてて紹介していきます

く どう あや 工藤 彩

プロフィール

1993年生まれ、川目地区出身、2012年大間高等学校卒業、2014年野又学園函館短期大学保育学科卒業、函館市内の私立保育園勤務を経て、2018年JICA青年海外協力隊員となる。2019年から1年4か月に渡り、西アフリカのブルキナファソ、中央アフリカのカメルーンで幼児教育に携わる。現在は佐井村役場会計年度任用職員として教育委員会に勤務。

きっかけは修学旅行で……
青年海外協力隊 工藤彩の
ルーツに迫る

早速ですが、工藤さんが青年海外協力隊員になろうと思ったきっかけは何ですか？

中学生のとき、修学旅行で東京に行ったんですけど、自主研修で青年海外協力隊OBの方のお話を聞く機会がありました。その方のお話を聞いて、素直に「あ、カッコいいな」と思っただけです。そのときから、自分も将来保育士になったら青年海外協力隊をやりたいと思いました。

——どうして保育士として青年海外協力隊に携わろうと思ったんですか？

実は保育士になろうというのは前から決めていました。修学旅行のあと、中学校の授業で自分の好きなことについて調べる機会があったんですけど、そこで私はJICAについてめちゃくちゃ調べたんです。そしたら協力隊の職種の中に幼児教育がありまして、もうこの道を進むしかないなと思いました。

——思い描いた道を、ブレずに突き進んでいったわけですね？

そうですね、ブレることは絶対になかったんです。例えば高校や短大、就職試験の面接で、将来のことについて聞かれたときは、「青年海外協力隊として発展途上国の子どもたちのために活動したいです」とずっと言い続けてきました。短大に入ってから、JICAの説明会にも参加しましたし、卒業論文でも発展途上国の子どもたちにつ

いて調べて発表しました。常に自分から周りに対し、「私は青年海外協力隊になるんだ」と発信していましたね。

良好な関係を築くカギは
互いの違いを認めて
受け入れること

——工藤さんは派遣された国で実際どのような活動をされていたのですか？

私は現地の幼稚園に配属されて、遊びや運動遊びなどを教えていました。あと、子どもの自主性や主体性を尊重した教育を促すようアドバイスをしたりしていました。

——実際に行ってみて、印象はどうでしたか？

現地の様子はあらかじめ聞かされていましたが、先輩隊員や現地のスタッフからも情報は入ってきていましたけど、実際に自分で見るのは印象が全然違いましたね。それでも、自分が想像

